

平成29年8月15日 第55号

柳川郷土研究会
会誌「水郷」付
すいきょう

瓦版

発行所 柳川郷土研究会
柳川市大和町栄1078-3
発行人 武末十治男
編集責任者 金子俊彦



火

「情けに生きる」

私は寺の生まれではない。もし祖母がいなかったら別の人生を歩んでいた筈だ。十三になった時、「お寺へ入ってくれないか」と祖母にすすめられた。私には気頭そんな気はなかった。「嫌だ」と断った。たまたま知人に萩須立平（ノモハン事件の師団長）がいて、「幼年学校へ入れ」と盛んに進めて居たことにもよる。勇ましい軍人の姿に憧れて、私はその気になっていた。

何日かたつて、また祖母がすすめたが、私の返事は変わらなかった。幾度か繰返わされた。そのうちに涙を流し頭を下げて頼み始めた。ついに私はその情に負けて言ってしまった。「オバアちゃん喜んでくれるなら。」それを聞いて「いつ死んでもいい」と言った。日頃から信仰の厚かった祖母は、殺伐な方へ私をやらせることが耐えられなかったのかも知れないと、あとで察しがついた。

進路の決定は人生の重大事である。最近の教育界では、本人の希望・能力・適正に依じて、やかましく論議されるが、そうした考えからすると私の場合は全く非教育的であり、「祖母の情にほだされるという。」前時代的な浪花節調そんなものであると非難されるかもしれない。しかし私はいま、そのことを悔んではいけない。それどころか必死に口説いてくれたことを深く感謝している。

一般的な考え方（武末十治男）

※人生の幸、不幸とは一寸したきつかけで変わることもある。幸を求めらるならば、普段からの自分の行いと気持ちの持ち方ではないでしょうか？心の施しは無料なり・感謝の心の実行は我身に返る、そんな気持ちを持つて過ごしたいものです。